

御嶽山火山防災避難計画資料編

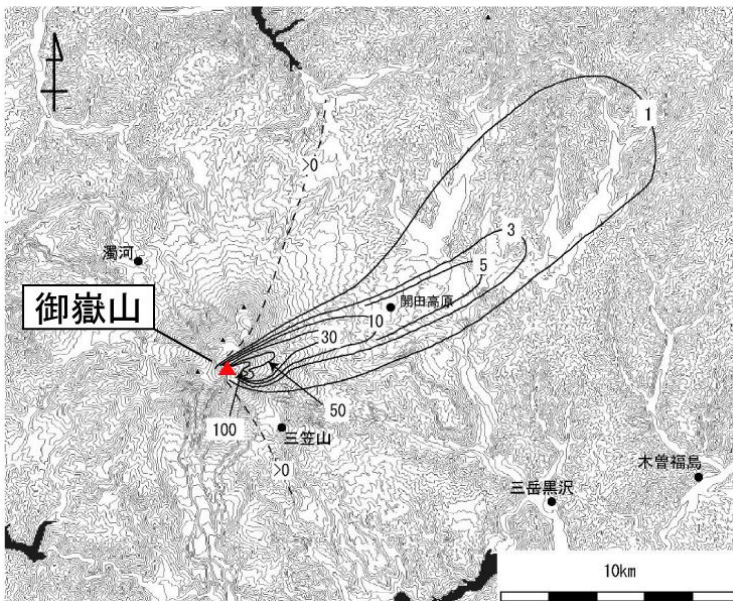
有史以降の噴火状況

1 1979年10月小規模噴火の状況

噴火に先立ち少なくとも6時間ほど前から山頂直下で地震活動の報告がされている。三ノ池の水は、透明度の高い水で知られていたが、噴火前の夏頃から三ノ池の水が濁りを生じ、湖水面の色も緑がかった青色に変色していた。また、9月6日三ノ池が非常に硫黄臭かったとの報告もある。

1979年10月28日5時頃噴火が発生したが、同日の夜には収まっている。噴火は、剣ヶ峰山頂南側に北西—南東に新たに形成された火口列（79火口列）から発生した。なお、火口列は、ほぼ直線に10個の火孔が配列されているのが確認された。

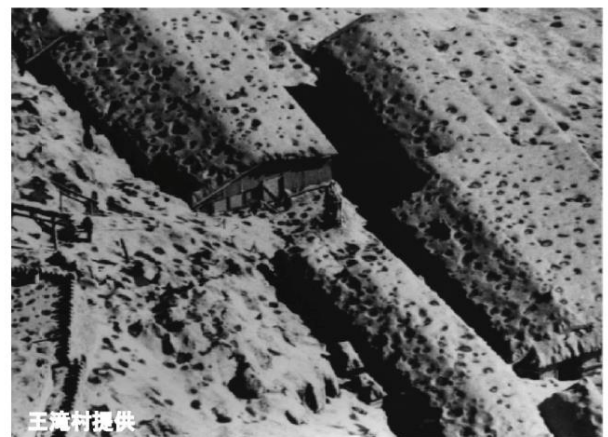
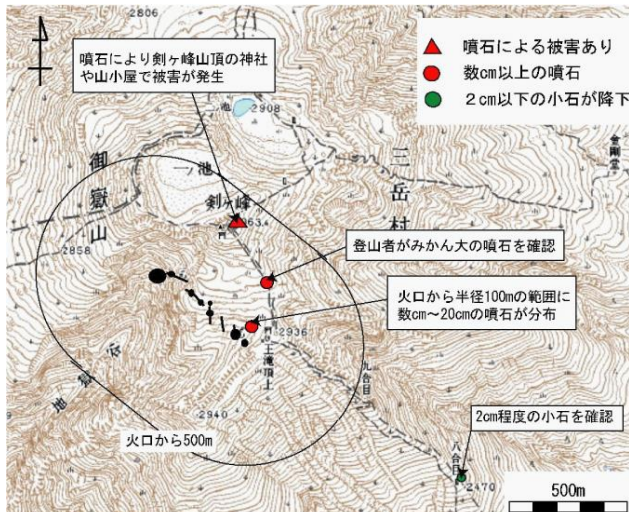
噴石の飛散距離は不明であるが山頂付近に飛散し、山頂の神社や山小屋に被害がでている。火山灰は北東に流れ御嶽山から約150km離れた群馬県前橋で確認され、その状況を【図1】、【図2】に示す。



- 噴石は山頂付近（火口から数100mの範囲）に飛散し、剣ヶ峰付近の神社や山小屋で被害が発生
- 王滝頂上付近でも数cm～20cmの噴石
- 降灰の分布軸は火口から北東側で、東側山麓の開田で厚さ1cm程度の降灰

1979年の噴火で放出された火山灰の山麓での分布(小林(1980)を元に作成)
実線は等層厚線を示す。図中の数字の単位はmm。

【図1】 1979年10月28日噴火に伴う降灰の状況



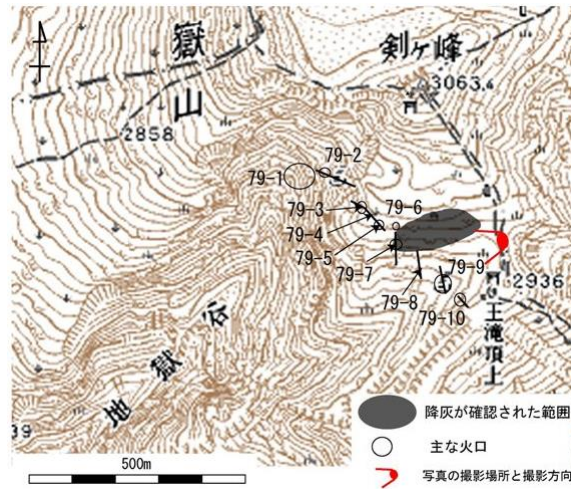
1979年の噴火で放出された噴石の状況
曾屋(1980)、小林(1980)、石岡ほか(1980)、気象庁(1980)に基づき作成

1979年の噴火での噴石による被害(1979年10月30日撮影 王滝村提供)

【図2】 1979年噴火での噴石の状況及び噴石による被害状況

2 1991年5月ごく小規模噴火の状況

火山性地震は、4月20日から増加、火山性微動は4月27日から断続的に観測された。5月18日撮影の航空写真に新しい噴気が認められたため、気象庁及び名古屋大学が現地調査を実施し、79-7火口周辺に火山灰を確認した。名古屋大学の調査結果によると火山灰は、【図3】のとおり79-7火口から東側の長さ200m、幅100mの範囲に分布していた。厚さは1cm程度なので火山灰の噴出量は数10t程度と推定される。



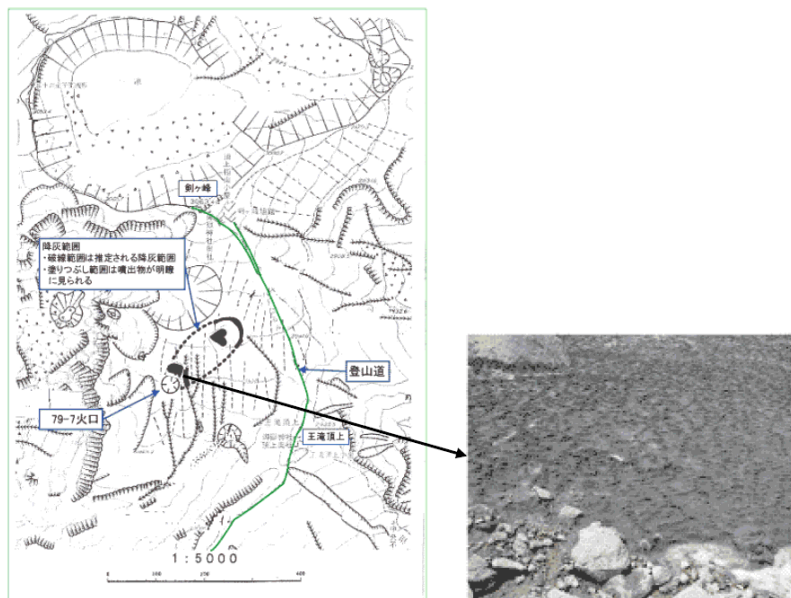
降灰分布の状況。名古屋大(1991)の調査結果に基づき作成

【図3】 1991年の噴火の状況

3 2007年のごく小規模噴火

GPS連続観測では、2006年12月中旬頃から地下の膨張を示すわずかな伸びの変化が観測され、火山性地震は、2006年12月下旬頃から増加した。また、火山性微動は2007年1月19日より観測される等、2007年1月以降は火山活動が活発な状態であった。4月以降、火山性地震、火山性微動が減少する等火山活動は静穏な状況になった。

気象庁が2007年5月29日に行った現地調査で、【図4】のとおり79-7火口から北東側約200mの範囲の残雪表面に火山灰を確認した。噴火が発生した詳細な時期は不明だが、降灰の状況から3月後半にごく小規模な噴火があったと推定される。



【図4】 2007年5月29日に確認された火山灰分布図

4 2014年の小規模噴火

火山性地震は、9月10日から11日にかけて一時的に増加し、その後次第に減少していたが、噴火発生とともに増加し、その後、次第に減少した。

火山性微動は、噴火11分前の11時41分頃から発生し始め、10月6日頃まで連続で発生した。

9月27日11時52分に水蒸気噴火が発生した。噴火当時、山頂付近が雲に覆われていたため噴火場所、噴煙の状況など不明であったが、【図5】のとおり火砕流の発生を中部地方整備局設置の滝越カメラで確認することができた。また、気象レーダーによると噴煙が東に流れ、高度は火口縁上約7,000mと推定された。その後の上空からの調査等で、噴火は79火口列南西側の剣ヶ峰山頂南西側に北西から南東に伸びる新たな形成された火口列から発生したことが確認され、火砕流の流下範囲は、【図6】のとおり南西方向に約2.5km流下していることが分かった。

噴石については、11月9日に御嶽山総合観測班が実施した調査では、長径60cm程度の噴石が剣ヶ峰山荘で確認された。また、長径30~20cm程度の噴石が火口から約1km離れた二ノ池本館及び約1.3km離れた二ノ池新館で確認された。山頂付近の分布状況を【図7】で示す。

この噴火で、平成28年3月29日現在、死者58名不明5名の被害者が出た。



【図5】 御嶽山 火砕流の状況
(2014年9月27日 11時56分頃)
中部地方整備局の滝越カメラによる。



【図6】 火砕流の到達範囲



【図7】 山頂付近の噴石分布状況
(東京大学地震研究所 調査結果)